

農業と科学

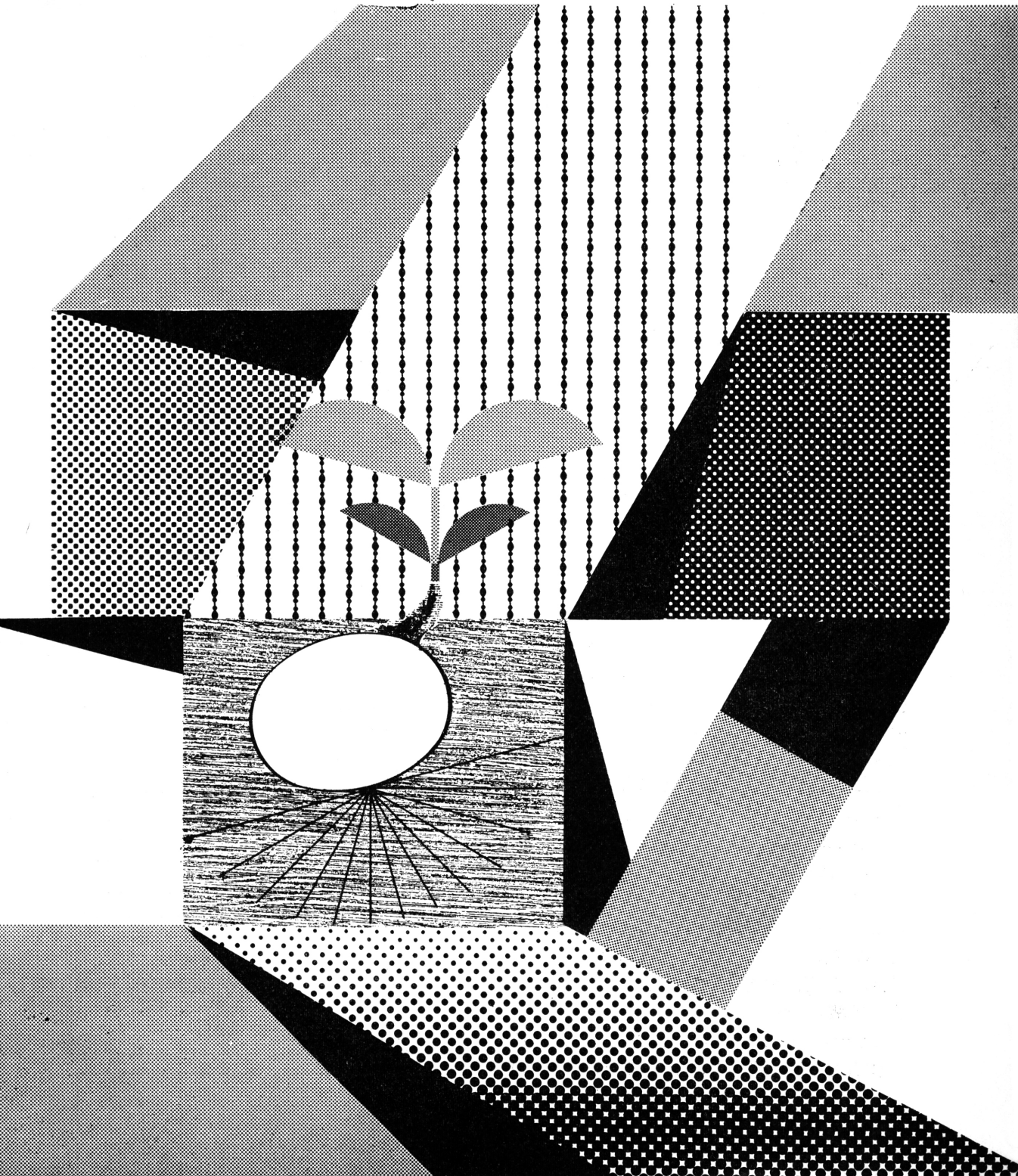
昭和48年7月1日(毎月1日発行) 第201号
昭和31年10月5日 第3種郵便物認可

発行所 東京都中央区築地1-12-22 コンワビル
チッソ旭肥料株式会社

編集兼発行人：伊藤和夫
定価：1部10円

農業と科学 1973 7

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.



工場緑化と樹種の選定

土壌と環境の良否が問題、

野菜試験場久留米支場

国 重 正 昭

はじめに

公害問題が、にわかに世間の注目をあびるようになって以来、公害対策の一つとして、工場緑化ということが関係者の間で真剣に考えられるようになってきた。

工場緑化ということは、何も最近に限った問題ではなく、精密機器工場等では製品の品質管理の面から、また業種によっては、企業イメージの向上のために、以前から関心が持たれていたことである。

工場緑化が、公害対策として有効な手段であるかどうかは別として、従来、ごみごみとして煤けたイメージしか無かった工場地帯に緑が復活し、美しい環境が生れるなら、工場従業員にとっても地域住民にとっても、これ以上のことはないと思われる。

工場緑化と副次的な問題の発生

① 植木価格の高騰

しかし、この工場公害問題が、いわば突如として社会問題化し、工場緑化に対しても早急な対策が要求されるにおよび、それに伴う副次的な問題が各地におきつつある。その一つは植木価格の高騰である。

緑化には植木が必要だということで、各地で植木の買いあさりが始まり、価格は平均してここ2～3年で2～3倍にまで暴騰しており、投機的な色合いさえみせつつある。

植木の全国的需給状況をみた場合、決して植木の絶対量が不足しているわけではなく、潜在的な手持ちの植木が市場に出まわるようになれば、逆に暴落の可能性も考えられている。

② 乱伐害のどが

もう一つ困った問題は、苗木生産者の供給する植木では、間尺にあわないということから、山の

木がどんどん掘出されるようになったことである。南九州の山では特にこれがひどく、工場緑化が山の緑をうばい、新しい公害を生んだという結果を示しつつある。

また、大小を問わず、各企業が手持ちの遊閑地を遊ばせておくのはもったいないということから、自社の工場の緑化用の植木をそこで自家生産し、余りがあれば、それを販売して利益をあげようという、いわば素人の植木生産もあちらこちらで計画されている。

工場緑化は純粋に公害対策として考えられるべきであって、そこに利害得失をからませるのは筋違いというべきであろう。

樹種の選定を誤まるな

① 公害に強い樹とはどういうことか

工場は、空気が汚れており、土壌条件も悪いから悪い環境ででも丈夫に育つ、いわゆる公害に強い木を選んで緑化すべきであるということが一部

< 目 次 >

- 工場緑化と樹種の選定……………(2)
土壌と環境の良否が問題
野菜試験場久留米支場 国 重 正 昭
- <肥料随想>
ユックリズムと肥料……………(4)
香川県農業試験場化学部 安 藤 奨
- 長崎のジャガイモ栽培の
現状と問題点……………(6)
長崎県総合農林センター
愛野馬鈴薯分場 知 識 敬 道
- ウドの栽培と施肥……………(9)
神奈川県横浜農業改良普及所 大 崎 彦 治
- <園芸相談車がやってきた>
ハウス土壌の現地検定と処方箋……………(10)
栃木県経済連農産部 河 野 利 雄
- “ハイ今日わ……。”(営業所めぐり)……………(13)
(1) 東京営業所の巻

では言われているが、これは間違いで、むしろ弱い木を植込んでも木の弱らないような環境づくりをする方向にむかうべきである。場当たりの声に緑化の方向をまどわされることのないよう、気をつけなければいけない。

工場緑化計画に、いわゆる公害に強い木と称して常緑樹を多く使う傾向がみうけられるが、常緑樹は冬も緑葉をつけ、年間通じて酸素の供給能力があるという利点の反面、濃緑色の葉は暗い重苦しい景観をつくる欠点があるので、むしろ落葉樹を主体にして、夏は緑陰樹として木陰を提供し、冬は充分日光の当る、明るい工場緑化計画をたててほしいものである。

② 植込む場所の土壌と環境の良否

工場緑化計画にしたがって植木を植込む場合、まず問題になるのは、植込む場所の土壌の良否である。

空気中の亜硫酸ガスの量とか、排気ガスの害といった、主として植物の地上部に対する影響は従来から論議されているが、植物にとって地上部と同じように、目に見えない地下部の根の生活環境も大切なことであって、地下水位の高い所、排水が悪く水の停滞する所、化学薬品の残留している所、周囲が堅く踏みかためられているような所に植えられたのでは、空気がきれいになり、肥料を充分に与えても、満足な生育をのぞむことはできない。

特に、工場内の敷地はコンクリートのかたまりや、種々の工作物の残滓が地下に埋まっていて、植物にとっては最も不適當な地下環境の所が多く、植込みに際しては十分な地ごしらえが必要である。

③ 植物にとり、好ましい土壌

植物にとって好ましい土は、土の固型分2に対し水が1、空気が1の割合で含まれているような土壌であるといわれている。

米国の試験例によると土2に対しピート1、パーライト1の割合に混合した土が、それに近い物理性をもっているといわれる。

植込みに際しては、植穴は充分深く、広く掘り、上記の割合になるようピート、パーライト等

の土壌物理性の改良剤を混入し、地下部の環境を良くしてやるのが、まず必要である。

植込みと、植込み後の管理が必要

山や野に野生している樹木は、一見いかにも丈夫で、どんな条件の所でも育つと思われがちであるが、実際には野生の植物は、広い範囲の土地のなかから、もっともその植物に適した環境の場所を選んで定着しているのである。

いいかえれば、幸運にもそのような場所で発芽したものだけが、生き残っているのであって、野生の植物だから、放任しておいても良く育つであろうという考えは間違いである。

植えられた植物が、つねに良好環境のもとで成育が続けられるよう、植込み後の管理にも充分気をくばる必要がある。植付けまでは、金も人手もかけるが、あとの維持管理は面倒みないというのでは立派な緑化の成果を期待することはできない。

緑化計画をたてるに当っては、植込み後の維持管理の容易なプランニングをたてることが大切である。いかに高価な木を使用し、見事な植込みを行っても、あとの手入れがむずかしく、いたずらに人手を要するようでは、良い緑化計画とはいえない。

おわりに

日本にはそれなりの事情がある

ヨーロッパやアメリカの一部の工場が、芝生にとりかこまれた美しい環境にあるのを見て、日本でも同じような芝生をつくろうとするならば、大変な費用と人手が必要である。

牧場型の風土をもつヨーロッパでは、芝生そのものがその土地の雑草のようなものであって、モンスーン型の風土の日本では、日本の風土にあった植物を利用するのが後の管理は容易である。

山村の採草地の、なだらかに起伏する山肌の美しさを思えば、設計さえ上手にされているなら、雑草を刈込むだけでも美しい工場緑化をすることはできるのである。

＜肥料随想＞

ユックリズムと肥料

香川県農業試験場化学部

安 藤 奨

緩効性肥料を使いながら

なぜ、せっせと働くのだろう

“ユックリズム”というのが最近流行しはじめた。大都会の真中に、歩行者天国の通りができる。大ニュースになる。人間の生活環境があまり目まぐるしく変わり、気の休まる暇のない昨今である。ゆっくり行動することに飢えている人間にとっては、ゆっくり歩く、ゆっくり考える、落ち着いて生活することは確かにあこがれである。

肥料の性質についても同様である。せっかちな日本人は、肥料の効果が目にみえるようにあらわれるのをよるこんだ。その要望に答えて肥料が製造されてきた。

ところが肥料にもゆっくり肥効を持続する緩効性肥料があらわれた。緩効性肥料は、もう新しい肥料とはいえないほど広く使用されており、今さらその説明をすることもあるまい。

緩効性肥料は施肥の省力ができるということで高く評価されてきた。わが国の農業にとって労働生産性の向上は、国際市場で生き残るために最も重要なことである。そのため、農業技術の研究は、労働生産性の向上という目標に向かって進められるものが主体をなすようになった。

このことは肥料においても同様である。農作業の時間の内容を見ると、施肥に要する時間は田植、刈取り、収穫調整などに要する時間にくらべるとわずかである。このわずかな時間まで問題にして、労働生産性を向上しようというのであるから、涙ぐましい努力である。

数年前、麦の全面全層まき栽培を指導していたときのことである。ある農家の主婦から、“種はまきっぱなし、肥料は全量元肥、草は除草剤、毎

日する仕事がなく、退屈でこまる”と、こぼされた。

わずかな施肥の時間まで節約して、その時間をなにつかうのだろうか。労働生産性の高い技術によって農家の農業生産が一層拡大され、国際競争力の強い農業経営が、すみやかに樹立されることを心から願うのであるが、その実態は、省力技術が開発されればされるほど、兼業農家が多くなっている。

緩効性肥料はゆっくり肥効をあらわす肥料である。それを使用する農家は施肥の時間も切り詰めて、気ぜわしく農業以外の職場で働くとは、なんと世知辛い世の中ではないか。農業以外に働くところのない主婦の、省力技術に対する気持ちがよくわかるような気がする。

緩効性肥料に興味を持ち、多少でも研究してきたものには、以上のような皮肉な現実には直面すると、なんとなくやりきれない気持ちになるだろう。私もその一人である。そして“緩効性肥料が、人間生活にもうすこし積極的に役立っている”というような大義名分はないものだろうか、考えてみたくなる。

土と水と肥料との関係

まだ解明し尽くされていない

緩効性肥料の肥効が長いことを証明するために、よく溶出試験が行なわれる。

溶出量が少なく、その肥料は水による移動が少なく、根圏に長くとどまり、肥効が持続すると説明される。作物に対する肥効特徴を明らかにするため行なわれた溶出試験を、自然環境との関連において考えれば、どんな結果が得られるだろうか。

農業関係では、肥料による水質汚染は心配ないといっている。しかし他の方面からは、最近の栽培技術は肥料を多用するので、それが水質を汚染してはいないだろうか—という疑問が投げかけられている。実態は調査しなければわからないことであるが、疑問をもたれることが、農業に従事するものにとって残念なことである。

土と水と肥料との関係は、極めて複雑である。そしてあまりにも「なぞ」に包まれているところが多い。しかし現在明らかにされている知識から考えても、土と水と肥料の間には相互関係がある

ようである。

土と水と肥料の調和が作物に適していると、作物の生育は旺盛になり、自然浄化能に適していると、浄化能力が大きい。作物栽培に適した条件と、自然浄化能に適した条件が同一であれば、問題は無いが、異なった条件であると、生産に重点がおかれた場合、浄化能力が減退の方向に進むことが予想される。

土の浄化能と土壤微生物

緩効性肥料の最も特徴的な性質

ところで、土の浄化能に関与するものとして、土の理化学性もあげられるが、いつも問題になるのが土壤微生物である。

化学肥料のやりすぎは土壤微生物の種類や数を減少させ、土の浄化力を減退させるといわれる。この点でも化学肥料は責められている。

河川の水質をよごしたり、土壤微生物にわるい影響をおよぼしたりするのが、土壤溶液の肥料濃度によるのであれば、それを回避する方法を考えねばなるまい。化学的に、物理的に溶出量を減少させた緩効性肥料は、土壤溶液の肥料濃度を減少させるのに役立つものと考えられる。

水稲に対する緩効性肥料の肥効試験を行なったことがあるが、速効性肥料の施肥量より2割減肥して、速効性肥料と同等ないしはそれ以上の成績を得た。

溶出量の少ない、根圏土壤に長くとどまる緩効性肥料は、作物を生産する場以外への肥料の移動を少なくするから、利用率が高くなり、作物の生産が増強される。

このことは、肥料の水質に対する影響を減少させ、水質汚染に対する安全性を一層高めるものである。

土壤微生物の働きについて考える場合は、肥料の土壤溶液濃度も大切であるが、肥料の種類についても見逃すことは出来ない。

天然有機物肥料は緩効的な肥効をしめすばかりでなく、土壤微生物のよき栄養である。土壤微生物の働きが旺盛になると、土壤有機物の消耗がはなはだしくなる。土の有機物に対する浄化能が旺盛になったともいえよう。

土づくりと有機物の増施

速効から緩効へ、単純から複雑な組成へ

農業総合研究所の渡辺兵力所長は“近年の日本農業は、地力を極度に軽視ないしは回避する方向に展開してきた”といている。

最近各地で土づくり運動がさかんに行なわれている。土づくりといえは有機物の施用、磷酸の増施、珪酸石灰の施用といったように、各地の処方はいきたいきまっている。

しかし、ここでよく考えておかなければならないことは、過去の肥培管理で土のどこが最も痛められたのであろうか。

土づくり運動に有機物の増施を取りあげると、農業を畜産公害のはけくちに利用しようとする人があらわれる。土の浄化力にも限界があり、作物の生産に必要な量にも限界がある。

また皆のきらう物は、農家もきらって使わない。畜産排棄物はまず使いやすい状態にすることである。そうすると、土づくりの資材として多くの人が利用するようになるだろう。

緩効性肥料に使用されている合成有機質肥料は、天然有機質肥料にくらべて土壤微生物のよき栄養とはいえない。したがって畜産排棄物によって製造された堆厩肥を十分施用することは、肥培管理の上から重要なことである。

健全な土壤に、土をいためない、よい肥料を施用し、安心して食べられる食糧を増産することこそ、今後の課題である。このような意味で肥料界も、はやい肥効からゆっくりした肥効へ、単純な組成から、複雑な組成へかわって行くような気がしてならない。

長崎のジャガイモ栽培の 現状と問題点

長崎県総合農林センター
愛野馬鈴薯分場

知 識 敬 道

I 長崎のジャガイモの由来

長崎県のジャガイモの歴史は古く、16世紀末ごろ、オランダ人によって長崎港に輸入されたのが、わが国での栽培のはじまりとされている。その後の普及については、資料が少なくはっきりしないが、長崎赤、長崎黄などが作られていた模様で、記録によると、明治6年から海外へも輸出されている。

しかし、栽培面積としてはさほどの事はなく、遂次ふえてはいるものの、第2次大戦中の昭和16～18年頃のピーク時で、約3,700ha前後しかなく、その後一時減少し、昭和30年頃以降本格的に増加ははじめています。

一方、種ジャガイモの生産については、昭和16年、全国にさきがけて採種保護地として国の指定を受け、採種事業を続けて来た。昭和25年には植物防疫法が公布されたが、長崎県も全国11県の中の一つとして、いち早く種ジャガイモ生産の指定を受け、今日に至っている。

このように、長崎県のジャガイモが暖地で古くから作り続けられ、現在では北海道につぐ一大生産地に発展したことは特筆に値すると言えよう。

この原因についてはいろいろあろうが、長崎が、古くから外国に向かって開いた開港場としての歴史や、土壌気象などの自然条件が、ジャガイモ作りに適していたことと、春秋2期作に適した短

休眠品種が育成されたことなどが考えられよう。

II 長崎ジャガイモの現状

1. 栽 培

栽培面積、収穫量の推移は、それぞれ図に示した通りである。

近年の畑作物の衰退は非常に激しいが、ジャガイモもその例にもれず、とくに北海道につぐ生産地であった東北地区の減退が大きい。

その中において、長崎県は、やや増加の状態であるので、全国的な比率での長崎県の地位は着実に上昇し、最近では、北海道を除く都府県で第1位の生産県となっている。

暖地のジャガイモは、春秋2回作れるのが特色だが、作期と作型の図に示したような4～5月出荷の春作早掘り…いわゆる冬作…が最近大きく伸びている。

この作型は、はじめ島原半島南端の無霜地帯および、その近辺の沿岸部に限られていた。しかし、最近はポリ被覆の利用、高値の取引きなどから、かなり不適地まで伸びており、今後検討を要しよう。

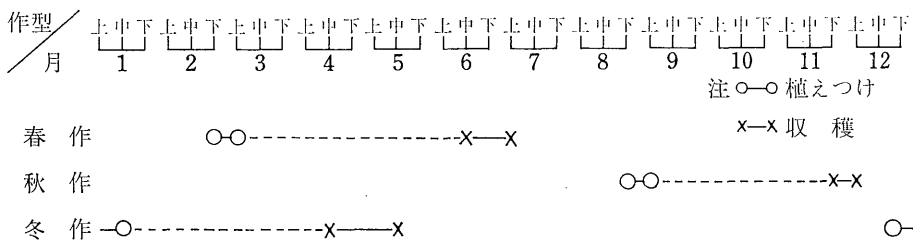
品種では、冬作は男爵いも、農林1号、メークインの3品種であるが、近年は特にメークインの増加が多く、作付けの5割以上を占めると推定されている。

普通作(春作・秋作)は、タチバナが主体で、シマバラ、ウンゼンがこれにつぎ、いわゆる暖地2期作用品種が9割程度作付けされている。

産地は、主体が島原半島で、作付け面積の50%以上がこの地区に集中している。その他では、西彼半島、下五島地区、北松地区などあるが、大きくまとまった生産団地はない。

2. 販 路

暖地ジャガイモの作期と作型



暖地のジャガイモは、ほとんど市場販売用であり、澱粉原料用の消費は無く、また加工原料用として消費される量もほとんどない。

春作産のジャガイモは、全国ほとんどの都府県から出荷されるが、北海道の30万t近くを別格とすれば、長崎の5万t台が最高で、これにつぐのは長野、福島の3万t前後である。

秋作は、産地が西南暖地に限られ、栽培面積もせまいので、全体の市場出荷量も少ないが、長崎が3万t以上と半量以上を占め、広島の1万t前後がこれにつき、ほかには大きな産地はない。

このため、長崎ジャガイモの市場占有率はかな

り高いが、相対的に、単位重量当りの価格が安いことなどから、特殊な早出し以外は、出荷先は京阪神以西の市場に限られている。

しかしながら、生産が春秋2回のため、ほとんど一年中出荷できる利点があり、これが市場の信用を得、価格形成を有利にし、ひいては特産地形成に大きく寄与していることが考えられる。

Ⅲ 今後の課題

1. 連作の問題

ジャガイモの連作は、病害の関係などから好ましくないとされている。しかしながら、ジャガイモに匹敵する有利な作物がないので、特に主産地では、ジャガイモの連作が常態化している。そのため、土壌の酸性化、Ca, Mgなど無機塩類の欠点が見られ、生産力増加の阻害要因となっている。

ここで問題なのは、土壌反応の矯正あるいは土壌改良資材、特に石灰質資材の多投は、そうか病を激発させる危険があることである。

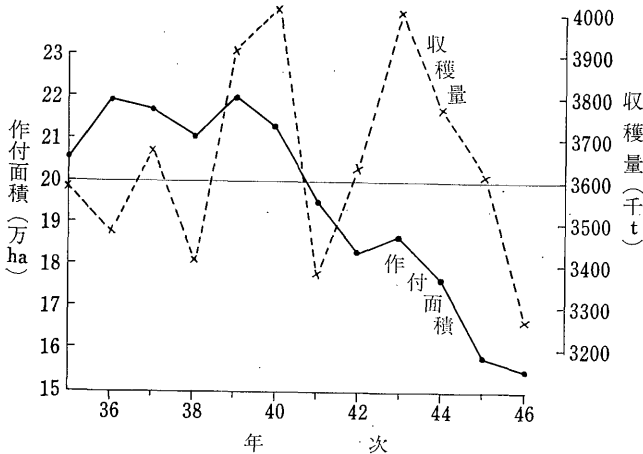
そのため、少量の土壌改良資材を用いることで、当面を糊塗しているが、このことが生産力停滞の主因であり、なにか名案がないものか、大方のご教示が頂けると有難い。

2. 品質の向上

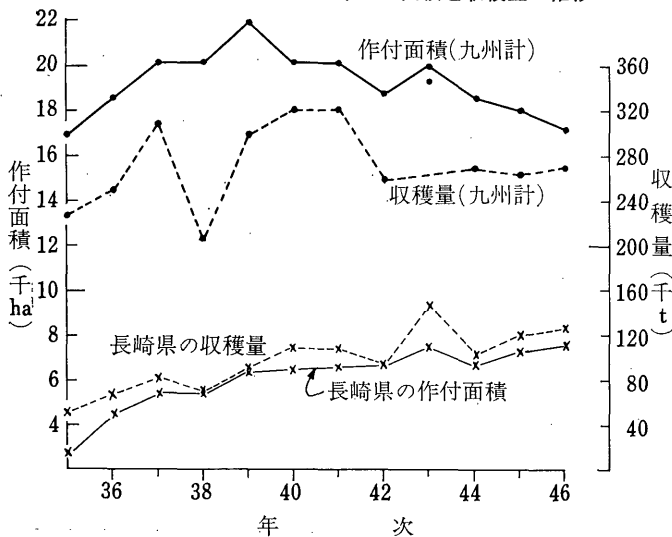
長崎ジャガイモは、新鮮で外観の良いことで好評を得て来た。そして、煮くずれがないので、用途によっては好まれるが、食味、澱粉価などが力不足であり、さらに良品質のものが望まれてきた。また出荷前処理が不十分であり、その面での市場の評価は低い。

品種では、よりすぐれたデジマが育成され普及しつつあるので、適正な出荷前処理と相まって、より良品質のものを供給することが大切である。

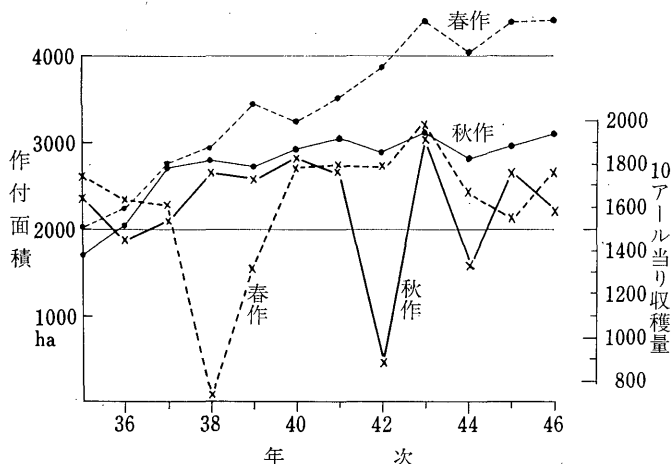
全国のジャガイモの作付面積と収穫量の動き



九州および長崎県のジャガイモの面積と収穫量の推移



長崎県のジャガイモの作付面積と収穫量の推移



冬作の高値がさがることが予測される。

また現在の冬作は、初霜の危険性の高い地域まで広がっており、これを抑えて、秋作の比率を高める必要がある。

4. 生産費の引下げ

暖地のジャガイモは、生産規模も小さく、病害虫も多いので、生産費の高いことはやむを得ない面もある。しかしながら、国際的に考えても、日本のジャガイモは、割高な農作物の代表例にされる程であり、現に冷凍加工品の形で輸入も増えており、この対応策を考えることは大切である。

3. 作期の適正化

春作は全国どこでも作られており、暖地の特色は、むしろ秋作にあるが、冬作の高値につられ、秋作の伸びはにぶっているのが現状である。しかしながら、北海道の出荷体制が完備するにつれ、

このためには、圃場作業の機械化、能率化と同時に、これに対応出来る品種の育成が必要であり、さらに選別、集出荷等の協同化、合理化等、広い意味での生産費の引き下げが今後の大きな課題となろう。

農家総所得は211万円

農林省は去る6月26日、47年度の農家経済の動向を発表したが、これによると、農家所得は全国1戸当り平均183万4千円となり、前年度を21.3%上回った。

この伸びは米の生産調整が始る前の42年度の19.5%を上回るもので、近年にない伸び率になった。これは米価の引上げや、野菜、畜産物価格が上昇し、所得のうちでも農業所得の伸びが大きく寄与した。

米価の引上げが農家経済の好転に大きく響くことを示しており、8月上旬からの米価審議会に向けて、米価引上げに対する農家の圧力は一段と強まるものとみられている。

47年度の農家所得の内訳は、出かせぎなどの農外所得125万2千円、農業所得58万2千円からなる。

農外所得は前年度比19.6%、農業所得は同24.9%の伸びとなり、農業所得の伸びが目立つ。農業所得は生産調整が始った44年度から伸び悩み、45、46年度は前年度に比べてそれぞれ減収となっている。

ところが47年度は、米価が銘柄奨励金などを含めて6.12%アップしたほか、野菜、畜産物などの価格が前年度に比べて2割程度上っていることなどから大巾な増収となった。

一方、農外所得は依然増え続けており、農家経済の農外所得への依存率は68.3%となった。しかし、これを前年度に比べると、依存率は1.2%減っている。

さらに農家の家計費は1戸当り平均154万2千円と、前年度より13.9%増となり、勤労者世帯の消費支出の伸び10.1%を上回っている。

地域的にみると北海道、東北、北陸などの農業地帯の伸びが目立ち、関東、近畿などの都市近郊は、野菜収入などからこれも堅調である。

農家所得に米の生産調整奨励補助金などの収入を加えた農家総所得は、1戸当り平均211万7千円となり、全国勤労者世帯の171万7千円に比べると24%も増収になっている。1人当りに直しても農家所得は45万4千円と全国勤労者の44万6千円に比べて所得が多くなっている。このように農家の1人当りの所得が勤労者のそれを上回ったのは初めてである。

ウドの栽培と施肥

神奈川県横浜農業改良普及所

大崎 彦治

はじめに

ウドは日本の気候風土に適しているためか、どこにも見られる作物であるが、まとまった生産地という大都市周辺に多い。東京では東京都下と神奈川県、大阪では大阪府下、名古屋では愛知県下と三重県というように大消費都市に直結している。なかでも東京都周辺の生産量は全国の約80%を占めている。

これはウドの栽培が1年1作であることから考えると大変不思議に思えるが、それはそれなりに経営上成り立っているから今日まで続いている訳で、また発展しようともしているのである。

横浜市におけるウド栽培は、昭和30年頃東京都下の栽培技術が伝わって導入されたものである。したがって歴史は浅いが、栽培技術の統一と軟化室の共同施設および根株の冷蔵施設を完備して、きわめて品質の優秀なものを周年計画的に出荷しているもので、市場側からも、各生産地からも注目されている。

栽培の概要

1. 種株の選び方

ウドの軟化栽培で成績があがるかあがらないかは、根株の良否で決定してしまう。その根株を養成する最初の技術は種株を選ぶことから始まる。

前年養成した根株の中から芽の形、大きさ、充実度、着色、さらに根群の状態を見て生産力のある系統を選ぶ。これは掘りあげた畑に根株を並べて行なうのであるが、この時に粗雑な選び方をすると系統がみだれるばかりでなく、根株が不揃いになって結局は軟化室に伏せ込んでから品質が揃わず軟化率を下げる。

単純な作業のようであるが、この選び方によって年々良い成績をあげる農家と、悪

くなる農家があるので、ある意味ではウド栽培の成功を左右する技術といってよい。

種株の生産面積は普通1株から3~4芽に分割できるので、栽培面積の3/4を準備する。

2. 植え付け時期と株間

植え付け時期は気温との関係から、その地方により適期があるので、その時期を失なわないようにすることはいうまでもないが、かならずしも早く植え付けることがよいとはいえない。ある程度地温があがり気候の定まった4月上旬頃でよい。

種株をそのまま定植すると欠株ができ、また生育も不揃いになるので一度仮伏せして催芽し、本葉1~2枚に開いた時点で植え付けると病害も発見できるので、畑全体が揃って生育をする。

栽植距離は従来は、畦巾65cm、株間45cmで10a当り2,400株であったが、現在は根株の掘りあげに大型トラクターを利用する関係から95cm、54cmで1,800株の栽植距離にしている。以前に比較すると10aで600株の減少であるが、根株の充実が良くなっているため約2,000kgの収量をあげることができ、かえって増収になっている。

3. 施肥量

ウドに関する肥料試験は、あまり行なわれていないので、栽培農家の成績を基準にして施肥設計を立てている例が多い。これはウドは粗放な作物なので、簡単に考えられていたことも事実であるが、実際に試験を行なうとなると栽培上の根株収量だけでなく、軟化上の収量も検討しなければならぬので、軟化室をもたないと試験ができないことも原因している。

さきに当所では、農家の協力を得て三要素の肥料試験を行なったが、その結果は表1のような成績であった。これはCDU化成(15・15・15)を使用し全量元肥施用で追肥は施用しなかったが、20kg施用区が最も良い成績になっている。その後CDU化成を始め各種緩効性肥料の全面散布施用も試験をしているが、共に20~25kg施用区が良い

第1表 ウドの施肥量試験 (昭46)(火山灰土)

N成分 肥料区	1株当り根株 重 量 (80株平均)	ウドの軟化生産量 (80株当り)								
		本 数				重 量				
		L L	L	M	計	L L	L	M	計	比率
30kg施用区	972 g	72本	61本	8本	141本	46.0kg	19.0kg	1.8kg	66.8kg	92.6
20kg施用区	1,133 g	129	34	10	171	59.4	10.7	2.0	72.1	100.0
10kg施用区	942 g	71	25	19	115	44.2	7.8	4.5	56.5	78.4

成績を示している。

これらの試験結果を基にして、標準施肥量はN 22.5kg, P 30kg, K 20kgとして、省力化を計るため、株間施肥をやめて緩効性肥料の元肥全面施用をすすめている。

4. 管理と労力

植え付け後の管理はきわめて粗放で、5～6月に2回程度、管理機によって中耕・除草を行えば十分である。その後は茎葉が繁茂するので除草の必要はない。

病害虫はネマトーダに弱いので、土壌消毒をしなければならぬが、そのほかはほとんど心配はない。

第2表 10a 当り所要労力

作業名	月	1	3	4	5	6	12	計
植え付準備			2.00	2.00				4.00
植え付け				14.00				14.00
除草中耕					4.00	4.00		8.00
掘りあげ	14.00						3.00	17.00
伏せ込み準備	8.00							8.00
伏せ込み	16.00							16.00
軟化室の管理	5.00							5.00
収穫調整			40.00					40.00
出荷、その他			8.00					8.00
計		43.00	50.00	16.00	4.00	4.00	3.00	120.00

労力は以前に比較すると大変省力化され、特に大型トラクターの導入により根株掘りあげの労力の減少と、軟化室の共同施設による収穫、調整労力の減少は、他の生産地より約30%も少なくなっている。10a 当りの所要労力は2表のとおりで、全体で120時間程度である。なお根株養成だけをみると、わずかに43時間である。

このように粗放野菜であることが、根株養成と軟化栽培を分業化することも容易であり、都市近郊で成立する要因になっている。

イ. 軟化室の共同施設

軟化室は一般にムロと呼んでおり、地形の関係から縦穴式が多い。このため根株の伏せ込み作業と軟化ウドの収穫、調整は大変な重労働で頭痛のたねである。ウド栽培を経営的に安定化するためには、この問題を解決しなければ発展しない。このため横浜市のウド栽培農家は昭和43年に3,000万円余の巨費を投じて横穴・地下方式の共同軟化施設を完成した。

この施設は地下5mの常温層に中央道を掘り、その左右に幹線通路3.5mを11本設け、その両側に14m²の軟化室を88室設置した。なお、これに自動給、配水施設と暖房機を取りつけて自動化している。

ロ. 根株の冷蔵と施設

1月から2月にかけて掘りあげられた根株は、そのまま全部伏せ込んだのでは、3、4月に収穫して終りになってしまう。しかも生産過剰から市場取り引きも不利なので、掘りあげた根株のうち約50%は冷蔵庫に保管貯蔵する。この冷蔵庫も昭和45年に220m²の施設を完備した。

冷蔵の温度は0度C、湿度は100%で保管し、

5月上旬以降9月末まで、5日おきに同量ずつ、30回にわたって順次出庫し、夏ウドとして計画的に生産出荷している。

収益性と今後の問題

ウドの生産地が都市周辺に多いことは先に述べたが、収益性をみると、3表のとおりである。この収益を見たかぎりでは都市近郊では成立しないように思えるが、注目したいのは時間当りの労働報酬である。1時間当り852円

はかなり高い金額であり、しかも周年出荷できることが、都市近郊で成立している要因と思う。

今後の問題として考えられることは、根株をどのようにして生産して行くかであるが、これは都

第3表 ウドの収益性 (昭48.10a 当り)

収 入	項 目	金 額
	取 量	1,400kg
平 均 単 価	平均単価	135円
	売上上げ金額	189,000円
生 産 費	肥料費	8,500円
	農薬費	6,000円
	種苗費	40,000円
	種数	10,800円
	出荷箱費	12,500円
	農機具費	7,000円
	雑費	2,000円
小 計	86,800円	
収 益	取 益	102,200円
	労働時間	120時間
	1時間当り労働報酬	852円

市近郊に多い不耕作地を借り受けて大規模経営をすることと、高冷地への委託養成による分業化の方向である。この結びつきができれば、ウド栽培はますます発展し、安定化すると思う。

〔園芸相談車がやって来た〕

ハウス土壤の

現地検定と処方箋

栃木県経済連

河野 利雄

ハウス土壤の特性

ビニールハウス内の土壤は、特殊な環境下になり、更に集約な土壤管理が行なわれる関係から、露地の畑土壤にくらべるとかなり変った性格をもった土になっている。

ここでハウス土壤と言っても便宜的な呼称で、人為的に攪乱された土と考えている。従来発表されたハウス土壤の特性を要約すると、およそ次のとおりになる。

① 表層に塩類の集積が多く、一定濃度以上になると作物はその障害を受ける。

② ハウスの土づくりが個人別、あるいは地域別に行なわれる関係から、養分含量など地区別により異なる傾向が見られる。なお各成分間の不均衡が多く、作物は拮抗作用などによる障害を受けやすい。

③ ハウスの土は乾燥と塩類集積の関係もあって、地表面が固まり透水が妨げられ、また溝では土壤硬度が増大し、理化学が悪化しやすい。

④ 作物の連作が強化されるため、土壤病害菌や有害な土壤線虫の繁殖が多い。

⑤ 土壤中におけるアンモニアの多発、あるいは硝酸化成が不円滑の場合、アンモニアまたは亜硝酸ガスがハウス内に揮散することがあり、葉が被害を受ける。なおガス関係では、炭酸ガス濃度の低下も問題となっている。

以上ハウス土壤の特性と言っても、問題点だけになったが、土壤の諸性質が根本的に不良であるということではない。

ハウスでは、幸い露地のように異常気象に災いされることがなく、灌水なども装置化によって容易に行なわれ、土壤検定の結果などを充分検討することによって、的確かつ総合的な土壤管理対策をたてることができ、健全な土壤の培養が可能である。



土壤検定結果の概要

ハウスを巡回すると、病虫害関係と肥培管理関係の2項目に質問が集中する。

言うまでもなくハウスでは温度管理がきめ手であり、日照、換気などの諸管理も作物に大きく影響する。作物の各種障害は、これ等の複合結果として現われることが多い。

ところで土壤中の養分関係は、その実態が手近に明らかにされる機会が少なく、ハウス毎の現地検定は、園芸農家にとって大きな魅力となっている。

栃木県の最近におけるハウス土壤の現地検定結果を、項目別に紹介すると次のとおりである。

(1) pH (H₂O) (改良目標6.0)。普通畑では5.0～6.0のものが大半であるが、新設ハウスを除く一般ハウスでは5.7～6.5のことが多い。

中には微アルカリ性のものがあるが、鉄・マンガ・ホウ素などとの関係が問題となってくる。

pH (KCL) の検定も行っているが、pH (H₂O) との差によって、土壤の母材やEC値の高低などを推定するのに役立つ。

(2) 可溶性アルミナ (FHK改良型簡易土壤検定器)。火山灰土では石灰の多少と密接に関係しており、ハウスでは置換性石灰が増えている関係から、可溶性アルミナは中量以下の場合が多い。沖積土では一般に少ない。アルミナの多少は石灰施用量を決定する場合、有力な根拠となる。

(3) 置換性石灰 (改良目標 300mg/100g)。古いハウスでは石灰含量が増え、数年を過ぎたものは改良目標を突破しているものが多い。

石灰量が黒色火山灰土で600mg～900mg、褐色火山灰土で500mg～600mg、沖積土で300mg～500mg以

上あれば過剰と見てよく、微量要素の欠乏も予想される。

石灰が多いにも係らずpH(H₂O)が6.0以下であれば、硝酸石灰の集積が多く、濃度障害の危険性が予想される。

(4) 置換性苦土(改良目標 35mg/100g)。栃木県内産の石灰肥料はいずれも苦土含量が多く、石灰肥料として苦土炭カルまたは苦土石灰(アルカリ分17%, く溶性苦土18%)が利用されている。このような関係から苦土含量の高まっているハウスが多くなった。新しいハウスではまだ苦土が少なく、加里との関係もあってトマトなどで苦土欠乏が見られる。

(5) 有効カリ(改良目標 25mg/100g)。加里は最近含量が一般に高まってきている。藁稈茎葉類の多量鋤込と、加里単肥の過量施用が原因であると考える。中には欠乏状態のものもあって、肥培管理のちがいが推定される。

加里過剰の場合は、苦土との関係を考えて対策をたてるが、元肥として加里%の少ない化成肥料の利用が望ましい。

(6) 有効態りん酸(改良目標 15mg/100g)。りん酸質肥料増施の傾向が続き、大多数はほぼ目標量を含むようになった。特に不良火山灰土地帯のハウスでは、熔りん等を多用した関係もあって100mgを越すものがある。

有効りん酸が過剰の場合、作物への影響は明かでないが、無りん酸栽培を行っても、品質・収量に大差はないようである。なお目標より少ない場合は、不足量のりん酸を土壤改良分として補給しその上で標準量のりん酸施肥を行う。

(7) 電気伝導度 従来は塩類集積による濃度障害が問題となっていたが、最近ではECメーターによる濃度測定が広く行なわれ、更に濃度障害回避の肥培管理(施肥、灌水、除塩など)が普及し、高塩類濃度による萎凋症状は殆んど影をひそめた。

(8) 土壤の物理性診断 養分検定試料について土性・土色などの鑑定は常に行っているが、できるなら、代表ハウスで土層断面を調査することが望ましい。

断面状態を知ることによって、はじめて具体的な処方箋をつくることができる。断面調査では特に有効土層の深さ、表土の厚さ、乾温、硬度など

に注目し、対策として必要に応じ深耕、容土、暗渠排水、有機物の多投などを考慮する。

土壤管理処方箋

ハウスの土壤検定はあらかじめ農協と協議し、おおむね7月から9月頃、作付作物の切替時で、元肥施用前に行うよう計画し、検定が終れば、約束の期日までに土壤改良と施肥の処方箋を一覧表にまとめて、関係者に交付する。

処方箋の検討会その他については、農協の指導計画に従って行うことにする。

作付野菜の中間生育期に、生育の診断を兼ね土壤を採取して再度検定を行うと、土壤成分の消長と作物生育との関係が一層明かになり、対策確立のうえで好資料が得られる。

処方箋に示す主な事項をあげると、次のとおりである。酸性矯正の資材と施用量(ハウスでは特に不足石灰の補給を考慮し、土壤区別に資材量を検討しておく)、目標量までの不足りん酸の補充一資材別と施用量(磷酸吸収力の大中小別に算定した施用量)不足苦土の補給量(多くの場合石灰質資材およびりん酸質資材によって供給される)、加里量の調節(改良後の苦土含量との関係を考え、過剰の場合は加里の減用)など各成分の平準化を考慮して設計する。設計に当たって所要資材の施用量表、含有成分量表など各種の表をつくっておくと便である。

次に施肥に関しては、元肥の適量を明らかにし、濃度障害の危険が予想されるときはその対策を示す。

また施肥効果を高めるため必要な条件があれば、その要点をあげておく。粗大有機物の施用は、土壤改良の重要な点であるが、栃木県では藁の利用が一般的で、10a当り年間2,000kg程度すき込まれている。

元肥の化成肥料は緩効性(窒素)の高度化成か、または有機化成が主体となっており、一部、硝酸化成抑制剤入りの化成肥料も、作物によっては使われている。

追肥は硝酸系のN-K化成が主で、最近液肥の利用が増加してきた。肥料銘柄を処方箋に明記する場合は、農協と協議しておくことと、農家の要望については特に留意し、処方箋で答えることが大切である。

〈 営業所めぐり 〉

“ハ イ、今日わ ……”

東京営業所の巻

河見泰成

勝負どころは売込みの巧拙

現地では、押しつ、押されつの大激戦

製造工業の“勝負どころ”は、売込みの巧拙によって決まると云って良いだろう。肥料製造工業として、決してその例外ではない。どんなにイメージ・アップされた企業であり、優秀だと自負するに足る肥料を抱えていようとも、売込みに成功しなければ、残念ながら最終的に果実を上げたという訳に行かない。

「全農」の銘柄指定を受けていると云ったところで、売込みに熱中しているのは、何も自分の会社だけではない。現地では押しつ、押されつ……、中には機動力に富む県内メーカーもあろうし、それこそ毎日のように、何社かの肥料メーカーの間で、陣地切り崩し戦が行われている訳だ。

激しい肥料売込みに成功する条件としては、イメージ・アップされた企業であることが必要であろうし、魅力的な肥料がバックにあることも必要だろう。しかし、最終的に売・買双方の間を取持つ決め手が、どうも“対人関係”にあるらしいから妙だ。

と云ってしまえば簡単だが、足場に恵まれた県内メーカーや、県外メーカーであっても複数の県担を派遣している会社もある。こういう面々を向うに廻しての逐鹿戦に明け暮れている県担の皆さんのご苦労は、筆者などが想像する以上のものがあろうと思う。

これまで随分長い期間にわたって、チッソ旭肥料(株)の当該地区営業所の県担の方々の案内で、各県のいろいろな産地を視察し「現地訪問」の型で本誌に掲載してきたが、その都度驚いたのは、“よくもまあ、こんなところまで自動車を乗入れるもんだなあ!”という経験を何度も繰返したことであった。

“こんなところ”とは“どんなところ、!”かーと云うと、人っ子ひとり通らないような真夏のミカン山の中であったり、ごろごろ、くねくねした山路を右に左に曲って行った、トンでもない所にあったスイカ畑であったり……。商売と云えばそれまでだが、ときには感嘆を通り越して、あきれ返ったこともあった。

つい最近まで栃木県を担当されていた江口さんが、“エへへ…、東京から栃木へはどう行ったら良いか、こ

と栃木県についちゃ、僕は県内のどのタクシー運転手諸君より通交路を知ってますよ。何故って、連中は営業順路しか走らないのに、僕の車はそれ以上に、イヤそれこそ県内の隅々まで入ってますからね…”と云われたことがある。

また九州では“帰社する途中で、台風何号ですか…に遭遇しましてね…、幸い中心ではありませんでしたが、自動車がズルッ、ズルッーと横すべりするのです…”というスリリングな話を聞いたこともあった。

そこで、“現地訪問”はまたの機会ということにし、ここ当分、各営業所の県担の皆さんの活躍振りを“営業所めぐり”シリーズにまとめることになった。

“気鋭のサムライがおるし…”

高度化成の見通しを語る別府さん

東京の営団地下鉄日比谷線「東銀座駅」を地上へ出て、万年橋傍から築地方面を見ると、左前方に黒みがかった13階建の「コンビル」が見え、その9階にチッソ旭肥料(株)がある。

エレヴェーターを降りて正面玄関を入ろうとすると、パネル越しに別府(東京営業所長・関東北総括)さんの賑やかな声と、新名(全所長代理・関東総括)さんの、いとも豪快な笑い声が響いてきた。珍らしいことに、今日はこのほかの県担の見なれた元気な顔が、全部揃っているようだ。

新肥料年度を迎えて、電話に、来客との応接にと、何かにつけて忙しい別府さんに時間を割いて頂く。

“何んや「営業所めぐり」とかいうのを書くそうや



なあ。そんなこと云うて、ここに何か材料になるものがあるのかいなあ?入社?昭和22年一景気の良うない時でなあ、チッソに入社した者は4人よりおらへん。その時の試験官が今のうちの社長児玉義忠さんや。入社後の6年は水俣暮らし、37年から4年間チッソ・ポリプロに転じたが、このときも随分と苦労したわなあ。チッソの肥料部へ転じたのは40年、牧村さんの後任としてや。

“そんな訳で、肥料界に入ったのもつい最近のことと思うとったが、気いついてみると、だいぶ古顔になった

と見え、今年度も関東北部会長（化成肥料協会の）はお前がやれーということになった。もっとも今年から児玉社長が化成肥料協会会長になられたので、そのせいであるかも知れんけどね。”

と、別府さんは苦笑い。

“余談はさておき、国際的に食糧、農産物の増産要請が強いので肥料に対する需要はますます旺盛、この傾向はわが国の場合でも同様で、特に高度化成の場合にその傾向が強い。”

と、別府さんが云われる高度化成の需要動向を“普通化成肥料のそれと比較してみると、次の通りである。

化成肥料の需要動向（肥料年度）キトン

	45肥実績			46肥実績			47肥見込			48肥想定		
	数量	数量	前年比%	数量	数量	前年比%	数量	数量	前年比%	数量	数量	前年比%
高度化成	2,417.1	2,505.3	103.6	2,641.4	105.4	2,775.4	105.1					
普通化成	982.3	903.6	92.0	869.9	96.3	829.7	95.4					

この表でみて判るように、48肥料年度の伸び率は高度・普通化成ともに47肥料年度に比べて0.3、0.9%それぞれ低くなっているが、これは今年の稲作減反動向が、昨年度と変らないとみでの想定であって、実際的には米の主産地における増産熱の高まりと、転作の定着化から、高度化成に対する実需はまだ伸びるものと見られている。

“こういう訳で、これまでやったら関東は畑作主体、東北は水稻中心と割切れたのが、転作の定着化から、東北でも小さいながら園芸の産地化が進むので、高度化成には相当期待が持てると思うてます。もちろん気鋭の面々が揃うておることやし、特に心配することはないけど、35万トンからの肥料をこなすと云うことは、なかなかの事やで…。幸い、うちには性格が割合ハッキリしとる肥料が多いので、この点大いにやり甲斐がありますわな…”

豪快な一面、細かい配慮

あけっぴろげな新名さん

別府さんと話をしている後で電話をかけている声が、東北弁になったと思うと、栃木或は茨城弁が暫らく続いたあと、今度は重い感じ？の九州弁が飛び出し、その合間に“アッハッハ…”と、軽いものなら吹き飛んでしまうかと思うような豪快な笑い声に変わり、広い事務所をゆすぶっている。所長代理（関東総括）の新名一生さんである。

“あなたの話し方を聴いていると、とても豪快で、手放しに明るくて、内証話はできませんね”と云ったら、“そうでもねえさ、これで結構お淑（しと）やかな所も持っておりますよ、アッハッハ…”。また大きな笑い声



が返ってきた。

“それでいて、存外、細かい所にも気がつくんでしょ？”と訊き返したら、“どう致しまして、生まれついでから攻撃がたの人間でして、退くことを知らん武骨もんですタイ…ウッフ…”と、含み笑いで煙幕。この人にしてなお、照(て)れることがあるとみえる。

宮崎県東郷町の生まれ、25年9月、旭化成工業（株）に入社、以来34年12月に肥料部（東京）に転ずるまで、延岡工場在勤。

“ヴェテランという訳で

はねえが、関東、東北関係で、肥料販売を担当しなかったのは、新潟、秋田、宮城の4県くらいのもんかなあ？”

だからあとの都県は殆んど回ったと云うことになる。これまで新名さんが走破した距離は、いったいどのくらいになるだろう？

“趣味は酒？ではなくて釣。それも川、海どっちでもいいが、この頃はあまり出ない。大方の想像とは逆に、至って無趣味の方で、ゴルフも“月1ゴルフ”をやるくらいなもんですタイ。イヤ根が無器用なもんでゴルフも一向に上手にならんけん。それで月に1回ぐらい出かけるとです、それを“月1ゴルフ”と申します。アッハッハ…”と、また暑さを吹きとばすような豪快な笑いが響いた。

販売戦線に活躍される

皆さん達のプロフィール

別府さん、新名さんとのインタビューを終ったあと、ちょうど居合せた児玉（埼玉担当）、小坂（長野担当）、光吉（茨城担当）、末吉（東京、長野担当）、栗崎（群馬担当）、実川（千葉担当）、真崎（神奈川、山梨担当）、後藤（栃木担当）、川端（技術サービス）の“9人のサムライ諸公”の気炎(きえん)などをメモすることができたので、ここにご紹介しよう。

“あくまでマイ・ペースで…”

児玉光弘（埼玉担当）の意見と抱負

31年3月＝大分県佐伯市豊南高校卒。全年旭化成工業入社。（延岡工場事務部業務課＝労務関係）37年11月＝肥料部（東京）へ、その後1年間化成部品管理課へ転じたが、39年12月再び肥料部へ復帰し、約1年間長野県担、39年12月＝群馬、栃木両県を担当。約半年後には群馬県のみ担当となり、



1969年9月以後埼玉県担。

これが、肥料にタッチして11年という、児王さんの経歴であるが、開口一番、わが児王さんはこう云ったものだ。

“わしの方針として、自分がメーカーであるということ、意識せんことにしとるのです。つまり、メーカーの売り子であるが故に、買うてもらうために、卑屈な態度になったり、いらんことを口にしたり…こういうことは一切せんてです。要するに「攻撃型マイ・ペース」というのかな？”

“熟柿を待つというのではなくて、もっと積極的に、常に前へ、前へという姿勢と方針で処理して行く。場合によっては、相手が考えて居そうなプランニングは、こちらで先に決めておいて話を進めると云った工合に…。もちろん、そのために周囲が少々にぎやかになる場合もあるが、これも止むを得んでしょう…。要するに相手の組織にゆさぶられちゃ駄目なんで、こっちが相手の組織をゆさぶらにゃいかんのですよ。何しろね…、12のメーカーの売り子が入るとるが、売り子1人というのはわが社だけで、他はいずれも複数の布陣、中には毎日のように機動力を発揮している県内メーカーもあると云う訳で、うかうかしとれんのですよ。”一と、大きな目王をギョロリ。男は敷居をまたげば7人の敵がいる一と云われるが、なる程大変なものだ。柔道(四段)のほか、ゴルフをときどき。根はやさしい由。

“セールスに臨む3つの信条”

小坂谷義(長野県担当)さんの生活と意見

昭和32年3月＝大分県鶴崎工業高校卒業と同時にチッソ(株)に入社。以後34年から37年まで水俣工場にあって製造関係の、また41年から45年8月チッソ旭肥料(株)へ転出するまで、水俣工場にあって分析関係の仕事を担当した。

“県担という仕事をやって行くうえで、わたしは3つの信条を持っています。”と云って話をして呉れたそれは次の通りである。

① セールスに撒すること、② おべっかを云わぬこと、③ あくまで自分が納得できる方法で対処する。

“長野県を担当して3年になりますが、この3年間に感じたことは(長野県だけではないかも知れませんが)肥料を配給のルートにのせるには、あくまで筋を通さなければならぬと云うことです。そのルートというのは、県施肥協議会→郡段階(展示圃)→農協であって、このコースを通らぬものは絶対に駄目です。”

いつもニコニコと、得(とく)な人である。今年6月 はじめて1児(男子)のパパとなった。

“農業環境激動のなかを行く”

光吉善美(茨城県担当)さんに訊く

“33年3月、福岡の大堀高校を出まして、同年5月5日旭化成に入社、以後46年8月16日にチッソ旭肥料(株)



東京営業所に転出するまで、福岡営業所におりました。前任者の上原さんが手堅く基盤を固めて行かれたのと、技術指導に当られる方々或は農協の皆さんのご支援を戴き、私なりに努力しているつもりです。ただご承知のように、鹿島臨海工業地帯周辺をはじめ、茨城県の農業と農業環境がどのように変貌して行くのか、そのほか県内における肥料配給事情も非常に複雑なものがありますのでねえ…。今後を予測することはなかなかむずかしいところ。ただ何と云ったってやるだけはやりませんとね…”

静かな風貌のうちに、光吉さんの闘志がひらめいた。児王さんと同じ柔道四段の強者。

“短気にくせに、急がずじっくり”

末吉政雄(東京、長野県担当)さんの哲学

“生れは栃木県の佐野市の田沼というところ。だが東京者同様です…。旭化成入社は30年5月。化成品販売部



(食品・肥料)におりまして、チッソ旭(株)には44年12月に参りました。はじめ約2年は東京、山梨を担当、その後1年ほどは群馬県を担当しておりました。現在は、今年の3月から東京

と長野を担当しておりますが、群馬県担時代に一度現地へご案内したことがありましたね。肥料と取組んでちょうど4年になりますが、はじめは随分まごつきました。が、現地の農協や普及所の皆さんのご指導で、まあまあということでしょうか。元来短気な性格なんです、またジックリ構えるところがありましてねえ、マイ・ペースでやって行きます。”と云い、“余談になりますが、私はタンゴやワルツが好きでしてね、レコードも何枚か集めてるんですよえへ…。と笑った。“どうです見掛けによらないでしょう…。”といかにも末吉さんらしい語り口。“見かけによらぬ”と云えば、段位こそないが15、6才から鍛えあげた剣士でもある。

“セールスはまだまだ勉強中”

栗崎実(群馬県担当)さんの手堅さ

“やあどうも、私を取材?何しろ27年4月に旭化成に入社してから、延岡、松戸で10年、東京、岐阜で10年とおったですが、殆んどどの事業所でも勤労関係でしたので、ここに配属されてセールスに変身とは意外でした。勤労関係の相手のよ



うに、法律であったり、複雑な人事関係であるのと違って、セールスはどこかカラッとしたところがあります。つまり、やり甲斐があるということでしょうか。これで半年を経過した訳ですが、小学校の1年生、目下、まだまだ勉強と吸収するのに一生懸命ですわ。”

“セールスは自分の志望ですわ。”

後藤武士 (栃木県担当) さんは語る

35年3月大分工業高校工業科卒業、全年4月チッソに入社し水保工場在勤。9年後の44年2月東京本社へ転じたが、1年8カ月で再び水保へ復帰。47年8月チッソ旭



肥料(株)に入るまで水保暮らしが続いたから、10年以上を水保工場で暮したことになる。

“工場では常に何か新しいものを完成しては、次のものの開発・研究に移るとい生活の繰り返しです。私は常にそうした環境にいたい。ですから江口さんの後任ではありますが、セールスは自分の方から志望したのです。が、栃木県を実際に回ってみて驚きました。よくまあ、あすこまで当社の肥料を売り込んだものだと思うと同時に、あらゆるところに連絡をつけてあるもんだと感心しましたね…。イヤ本当云うと、数量を落しちゃ大変だし、気が重いです。それがまた励みにもなる訳で、大いに張り切ってる訳ですよ。”

“趣味と云うて、わしゃ不趣味の方で…”と云ってなかなか口を割らなかったが、後藤さんが10年以上にわたり茶道(表千家)に精進されてきたことを、筆者ははじめて知った。

“47年度を検討中です。”

真崎之男 (神奈川、山梨担当) さんのこの1年

“前任の高橋さんがこまめに開拓されたあとを任されたのは光栄ですが、それだけに気重い感じがなかなか



取れませんでした。1年経ってみてやっとこの頃コツが呑み込めたというところでしょうか。当社に来るまで、チッソでは専ら資材、それも包装材料の管理関係の仕事をやっておりましたの

で、肥料のセールスとはあまり関係ありませんでした。神奈川、山梨両県ともに経済連さんが非常に積極的なので、やり甲斐があります。統制率も上っておりますね。

出生地は東京の下町=足立区の西新井大師の附近の由
“趣味と云えば嫌いなものはないが、謡曲、弓術、麻雀が好きだとしておいて下さい。”とのことであった、

“農家にほめられた時は愉快だね”

実川寛治 (千葉県担当) さんの感慨

群馬県前橋生まれ。37年4月チッソに入社し、全年8月

に肥料部に配属されてから、現在まで(チッソ時代から46年6月まで主として受渡業務)肥料関係だけを歩いてきた。46年7月から、前任の中島さんの後を受けて千葉県を担当して今日に及んでいる。



“受渡の仕事をやったから、全然無縁ではない訳ですが、それでも実際に現場へ出るとなるとやはり緊張しましたね。今となれば、農協や普及所の皆さんとのやりとりも、どうと云うことはありませんが、はじめはなかなか自分の思うようにしゃべれず弱ったものでした。千葉県を担当して2年になるが、どうやら開発に成功した地域で、しかも良い成績が出たと云って、農家にほめられたときほど愉快なことはありませんね。”とこの10年選手は目を細めた
“趣味は?”と訊いたら、“麻雀一方…”と云いかけて、“麻雀とパチンコとしておいて下さいよ。エヘ…”と笑った。

“土をいじるのが大好きで…”

川端辰彦 (技術サービス) さんの信条

信州大学農学部で植物病理を専攻した、土をいじるのが好きで好きで、仕様がないう人である。40年12月チッソ(大阪)に入社し、41年2月6日に東京に来てからも肥料一と筋に歩いてきた。この間44年7月から47年



3月まで、群馬県担となったが、現在のはもっぱら“技術サービス”として、あちこち飛び歩いている。

“苦労したことと云ったら、チッソで技術サービスをやってた頃、CDUやCDU化成とはどんなものか、社内への理解や、社外へのPRのほか、農事試験場その他との連絡に骨が折れたこと、それと44年以後は県担をやりましたが、製品の売込みは始めてのことなので、自分にこれができるのかと、非常に心配したものでした。良いことでの記憶はあまり残っておりませんね…”とのこと。

32才という年齢に似ず、どこか老成した風格をただよわせながら、ひと言(こと)ひと言を噛みしめるようにして話をする一塵何不思議な魅力の持主である。

あとがき いよいよ本格的な暑さになりました

皆様いかがお過ごしですか、お見舞申し上げます。農業、食糧事情も国際的に揺れ出しました。慢性的な飢餓時代の到来を、どうしても覚悟しなければならぬのかどうか、われわれもはっきりしなければならぬようです。

7月号以後の発行手順は至極く順調に進んだのですが、余儀ない事情から全農連の三橋会長から頂戴する予定の原稿も、次号送りの止むなきに至りました。お詫び申し上げます。(K生)